



Title	脊柱のX線學的研究補遺(椎體高前後比曲線, 椎間幅前後比曲線に就いて)第3報
Author(s)	淺井, 卓夫
Citation	日本医学放射線学会雑誌. 1952, 12(1), p. 24-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/20098
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

脊柱のX線學的研究補遺 (椎體高前後比曲線, 椎間幅前後比曲線に就いて)

第 3 報

大阪大學醫學部放射線科(指導 西岡時雄教授)

淺 井 卓 夫

(昭和26年12月1日受付)

3. 脊椎痛の一列に就いて

私は本研究の第1報及び續報に於て、先ず脊柱X線像觀察の補助として椎體高前後比曲線及び椎間幅前後比曲線の計測を提唱したが、本法に依つて脊椎痛に次の二型を見出した。

即ち一は痛みを訴える部位に一致して椎間幅前後比の限局性異常を認める型で痛みは一過性で且つ激しく、他は疼痛部を中心に數椎間に亙る椎間幅前後比の異常即ち脊柱姿勢の異常を認める型で姿勢異常としては直立姿勢を示すことが最も多く疼痛は持続性である。

こゝに於て此の二型の間に關聯性有りや否や、又更に疼痛を伴うと否とに拘らず畸形性脊椎症との關聯性の有無が考えられなければならない。前述の第二の型の脊椎部がすでに述べたように輕微な畸形性脊椎症の夫れと各種の點で類似し何れも椎間組織の非特異性變化に歸すべきものと考えられ、又豫後良好な脊椎痛が餘りにも多く、年齢的すれを考慮すれば畸形性脊椎症の頻度と符合する事よりしても之等の間の關聯性を考察する事は決して飛躍した推測ではあるまい。

多數症例を検討した結果得たるところを先ず提示すれば、椎體高前後比及び椎間幅前後比曲線より新に得られた脊椎痛の一列とも云う可きものであつて次の如きものである。

- a. 疼痛、曲線異常共に無き健常脊柱。
- b. 椎間幅前後比曲線の限局性異常とその部に一過性激痛のある脊柱。
- c. 椎間幅前後比曲線の限局性異常あるも疼痛

無き脊柱。

d. 前記椎間幅前後比曲線異常部位を基底として汎發性の椎間幅前後比曲線異常を呈し、疼痛を曲線異常の基底部、中央部又は上端部に訴える脊柱。

e. 汎發性の椎間幅前後比曲線異常あるも疼痛無き脊柱。

f. 汎發性の椎間幅前後比曲線異常の基底部に當る若干椎體の前上下縁に縁嚙形成を示し、曲線異常の基底部及び中央部又は上端部に疼痛のある脊柱。

g. 上項と同じであるが疼痛のない脊柱。

以上各段階をaよりgに向い逐次に進展して健常脊柱は畸形性脊椎症脊柱(詳しく云えば畸形性脊椎症中の一型であり之に關しては別に發表する)へと移行するのであつて、かつて華々しく論争せられた畸形性脊椎症と脊椎痛との關係の問題も解明せられた譯である。尙お二次的な問題ではあるが外傷と本系列との關係についてはa→d, c→dという變化の原因たり得ようと云うに止める。

理解に便するためaよりgに至る變化を圖解すると第1圖の如くなる。

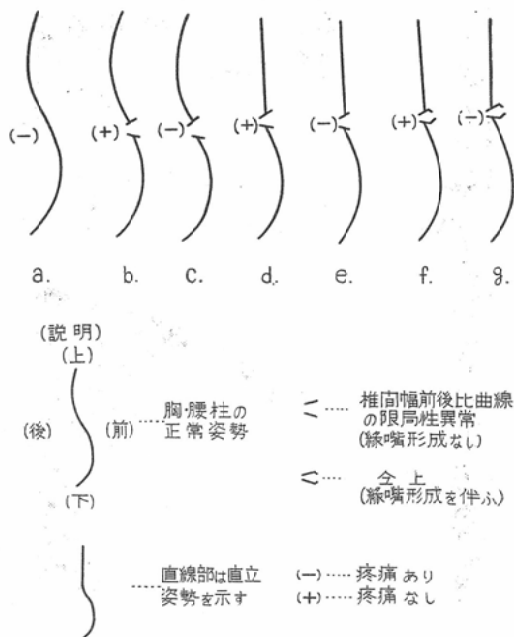
次に之等各項を逐次移行した代表的症例を一、二述べる。

症例 1. (a. b. c. d. e.)

河○氏。24歳女。(昭和25年)

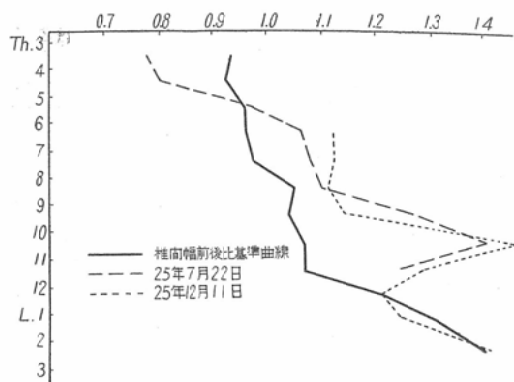
昭和25年3月頃胸柱下部に激痛があつたが放置しておいたところ數日にして輕快しその後何時とはなしに疼痛は消失した。(a→b)

第 1 圖



昭和25年7月21日胸部 X 線像撮影時側面像を見ると第10胸椎間にかなり著しい椎間幅前後比曲線の限局性増大が見られたが疼痛は全く無かつた。(c)

第 2 圖
(症例 1.)
椎間幅前後比曲線



昭和25年12月上旬より前回と同じ部位に疼痛を訴えて来訪した。叩打痛は第9及び10胸椎棘状突起にあり第7胸椎棘状突起にもやや軽いが同様叩打痛がある。12月11日の X 線像について観るに骨

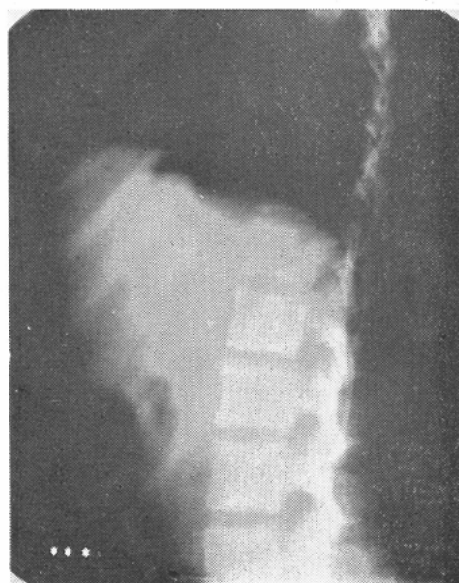
構造には全く變化を認めないが側面像に於て第10胸椎間の曲線異常は前回と同様で、それより上位の各椎は著明な直立姿勢を呈する。(d)

症例 1.

a. (昭和25年7月22日)



b. (昭和25年12月11日)



昭和26年4月17日、疼痛は殆んど消褪した。X線像にては骨構造に依然變化なく、直立姿勢は前回同様である。

昭和26年9月18日、疼痛は消失した。X線像は前回、前々回と同様である。(e)

X線像と椎間幅前後比曲線は圖に示す如くである。

症例 2. (d. e. f. g.)

出○氏。36歳女(昭和25年)。

昭和12年1月28日、第12胸椎及び第7胸椎棘状突起に叩打痛著しく、且つ起居動作時下部胸柱に自發痛を訴えX線像撮影を行つた。X線像所見としては骨構造には全く異常を認めないが第12胸椎以上第4胸椎邊りまで著明な直立姿勢を示す、すなわち叩打痛は直立姿勢の基部及び中央部に當る。(d.)

疼痛はその後1、2年つゞいたが次第に消褪した。(e.)

昭和17年頃から再び同じ箇所に軽度の疼痛あり2、3度X線像を撮影したがフィルム消失しその所見は明らかでない。

症例 2.

a. (昭和12年1月28日)



b (昭和25年12月7日)



昭和25年9月頃より疼痛やゝ増加したような感じがあつたので同年12月7日X線検査を受けた。その所見は直立姿勢は従前と同じ椎位に互つて著明に存し、特に注目すべきは第12胸椎の前下縁、第1腰椎の前上縁に可なり著しい縁嘴形成が見られ此の二椎の相對する邊緣は軽度の骨硬化像が見られる。中下部胸柱の直立姿勢部には縁嘴形成は全く見られない。(f.)

その後疼痛は次第に輕快し1年後に於ては全く消失している。(g.)

本例の経過は前後15年に亙るがこの間特種な治療は何等行われなかつた。

4. 總括

私は脊柱X線診断の能力向上を企圖し椎體高前後比曲線及び椎間幅前後比曲線計測による補助診断法を提唱し、之を用いて所謂脊椎痛に關して二、三の新知見を加えた。

すなわち椎間幅前後比曲線に限局性異常を示す一過性脊椎痛の新形式を設けた事、及び之を初發症狀とする脊椎痛系列を見出した事は先人の未だ窺知し得なかつた所である。

私の見出したこの脊椎痛→畸形性脊椎症系列に依つて發生する畸形性脊椎症は畸形性脊椎症中の

一型にすぎぬ事は私の別に論ずるところであるがその頻度は少くとも畸形性脊椎症例の三分の一に達するものと考えられるので、往年華やかに論ぜられた畸形性脊椎症は疼痛を伴うか否かの問題も之により解決せられたと信ずる。

脊柱X線診断の進歩をかへり見るに、X線の発見後間もなくより生體に於ける脊椎病變の記載に始まり、次で Schmorl 等により病理解剖所見とX線所見との關係が明かにせられ、更に1930年代後半よりは Güntz 等の努力によりX線所見と脊柱機能との關係の解明せらる可き段階に入つたが

此の頃より進歩の速度が急に減じた感がある。その主因となるものは椎間組織がX線的に現示出来ない故に到底判定出来ないと云う觀念にあると思われる。私は本研究により椎間組織疾患のX線診断學に一畝を打ち込み得て、脊柱X線検査の新しい進路の一つを示し得たと信ずるものである。

5. 結 論

椎體高前後比曲線、椎間幅前後比曲線の脊柱X線検査に用う可きを提唱し、且つ之によつて脊椎痛の一系列を明らかにした。